



図12 後円部頂埴輪列検出状況(南東から)



図13 形象埴輪(13トレンチ出土)

#### 4. 出土遺物

##### (1) 埴輪

第7次調査では円筒埴輪と朝顔形埴輪、形象埴輪が出土している。

円筒埴輪は後円部頂(図12)、17トレンチ、11トレンチでまとまった資料を得ている。円筒埴輪は薄手で赤褐色を呈するものと、厚手で淡褐色を呈するものに大別でき、後円部頂やそれに続くスロープでは前者が主体を占めていた。1段目平坦面では後者が主にみられ、使用する埴輪に差異が認められる。13トレンチでは円筒埴輪の底部と家形埴輪などの形象埴輪(図13)が出土している。家形埴輪には貼り付けで柱を表現した壁の部分などがあるほか、屋根部と考えられる破片も出土している。これらは3段目斜面上部を中心に出土しており、後円部頂が削平された際に転落したのと考えられる。(東方)

##### (2) 鉄製品

鉄製品は第6次調査の際に盗掘坑から、第7次調査の際に南北第2サブトレンチから出土している。盗掘坑出土品には鉋やりがんな、小札状品、針状品などがあるが、いずれも小片であり詳細は明らかでない。南北第2サブトレンチでは、刀15点、剣5点、鎌1点、有袋斧4点、柄付斧2点、刀子9点以上、蕨手刀子5点が出土している。

刀は抜き身と考えられる1点(図14-1)をのぞいては、おおむね木質が良好に残存している。柄縁・鞘口に漆を塗り、直弧文を刻むもの(図14-2・3)を確認している。鞘木は2枚合わせであり、刀身は平造りである。剣も木質がよく残り、柄縁・鞘口に漆を塗るが、文様を刻むものはない(図14-4)。刀と同じく、鞘木は2枚合わせで刀身は平造りである。茎は柄木に差し込んでいる。

鎌は通有の直刃鎌である(図14-5)。有袋斧はいずれも小型で、袋部断面が方形で無肩のもの(図14-6・8)と袋部断面が円形でわずかに肩のあるもの(図14-7)とがある。柄付斧はどちらも小型品で、柄をねじってある。横斧(これまで「柄付手斧ちような」と呼称されてきたもの:図14-10)と縦斧(図14-9)とがある点は注目される。刀子(図14-14~16)は完形品7点を含む。蕨手刀子は、柄が直線的なもの(図14-11・13)と背側に反るもの(図14-12)がある。(橋本)